

第三十九回野尻湖クリルタイ

松井 太

第三十九回野尻湖クリルタイ（日本アルタイ学会）が、二〇〇二年七月二十一日（日）―二十四日（水）にわたって開催され、のべ五十四名の参加者が集まった。参加者のコンフェッションの内容は概ね下記の通り。

池尻陽子（筑波大・学部）は清朝とチベット仏教の關係に關心をもつ。市丸智子（九大・院）は元代經濟史を專攻。九州史学会大会で「元代における貨幣表示について」を報告。伊藤梓（日大・院）は卒論で清朝帰属前後のチャハル部の動向を扱った。梅村坦（中大）は東洋文庫に将来されたサンクトペテルブルク所蔵ウイグル語文献マイクロフィルム資料の仮目録を公刊、また「ペテルブルグ所蔵ウイグル文書 SI 4bKr. 71 の一解釈」（『内陸アジア言語の研究』一七、二〇〇二）を脱稿。王宏剛（上海社会科学院）は客

員として千葉大に滞在中。大石真一郎（甲南大非常勤）は新免科研報告書に「ウイグル」語新聞「貧者の声」について」を執筆、『史学雑誌』『回顧と展望』のモンゴル期以降を担当。また『内陸アジア文字資料オンライン・リソース』研究プロジェクトに参加。大多和正夫（東北大・院）は卒論で清代モンゴルの襲爵を研究し、修論では清朝支配下におけるジェブツンダンバの影響力の考察を志す。岡本和也（北大・院）はジョチ・ウルスとルーシ諸侯との關係を研究中。北海道中央アジア研究会では「一四世紀後半のジョチ・ウルスにおけるママイ・オルダ」を口頭報告。奥山博志（筑波大・学部）は入関後清朝の統治機構に關心をもつ。小沼孝博（筑波大・院）は中央民族大・イリ師範学院での留学から帰国。「在京ウイグル人の供述からみた一八世紀中葉カシユガリア社会の政治的變動」（『滿族史研究』一、二〇〇二）を発表、また滿族史研究会で「カザフ・ニールの編立」を口頭報告。華立（大阪経法大）は科研費で「清代回民の新疆移住史の研究」を進行、中国第一歴史檔案館で「軍機處滿文録副」を中心に資料調査。また『古代中国高句麗歴史叢論』（黒龍江教育出版社、二〇〇一）、『現代アジア最新事情―二一世紀アジア・太平洋諸国と日本』（大阪経法大出版局、二〇〇二）を共著・分担。廉屋哲也（新潟大・学部）は現代モンゴルにおける牧畜業につ

いてネゲデルを中心に扱う卒論を準備中。喬井唯信(中大・院)は近代の清朝・ロシアの外交関係を、華夷秩序も視野に入れつつ研究中。菊田悠(東大・院)は「宗教のリソーシ化と多元的活用モデル」(『超域文化科学紀要』二〇〇二)を発表、また九月からウズベキスタンでのフィールド調査を予定。菊池俊彦(北大)は「胡馬と蝦夷の馬」(『北の環日本海世界』山川出版社)を発表。北海道でも大陸北方地域の考古学に関心をもつ研究者が増加しているとのこと。

楠木賢道(筑波大)は「天聰五年の大凌河攻城戦とアイシン国軍の火砲」(『破壊の諸相』筑波大学、二〇〇二)を執筆。桜井智之(中大・院)は第二五回白馬合宿で「アラブによるブラハラ侵攻について―クタイバの征服までを中心に―」を発表。佐藤貴保(阪大・院)は西夏の貿易政策を西夏文の法典や漢文史料を用いて研究中。また「烏臺筆補譯註稿」(『中国研究集刊』三〇、二〇〇二)の執筆にも参加し、元朝初期の諸制度とそれに先行する西夏の制度との類似点をも検討中。真田安(立教大非常勤)は新免康・王建新との共著『新疆ウイグルのパザールとマザール』(東外大イスラム文化シリーズ)を公開。澤田稔(帝塚山学院大)は*Journal of the History of Sufism* 3 (2002) に英文論文“Tarim Basin Mazārs: A Fieldwork Report”, “A Study of the Current Ordām-Padishah System”を寄稿。設

樂國廣(立教大)は科研「オスマン帝国における近代化」を組織。また「オスマン帝国からトルコ共和国」(『史友』三四、二〇〇二)を発表。澁谷浩一(茨城大)はモスクワでの在外研究から二〇〇一年五月に帰国。白石典之(新潟大)は松田孝一科研とも共同でモンゴル高原のフィールド調査を実施、さらにチンギス・カン関連の遺跡調査を目的として「新世紀プロジェクト」をモンゴル科学アカデミー歴史研究所と立ち上げた。また「モンゴル帝国史の考古学的研究」(同成社)を上梓。新免康(中大)は真田安・王建新との共著の他、科研報告書『中央アジアにおける共属意識とイスラムに関する歴史的研究』を公開。杉山清彦(阪大・学振)は松村潤『清太祖実録の研究』の書評を執筆(『満族史研究』一)。鈴木宏節(阪大・院)は古代テュルク史を専攻。トニユク碑文の考察を中心に修論を準備中。張栄江(東北学院大・学振)は夫人と共に参加。『清代藩部研究』(黒龍江教育出版社、二〇〇一)を出版、現在は入関前の清朝の対モンゴル政策・満蒙関係について研究中。中田裕子(龍大・院)は修論で唐代から五代に至るソグド人と突厥との関係を扱った。野田仁(東大・院)は一八―一九世紀のカザフ・清朝・ロシアの関係史を研究。新免科研報告書に「露清関係上のカザフスタン」、また「清朝史料上のハ薩克(カザフ)三[部]」(『満族史研究』

一)を執筆。萩原守(神戸商船大)は二〇〇一年のモンゴル学会秋季大会を主催。また“Xinhai Revolution and Mongolia”(久保田文次編「二〇世紀中国の構造的変動と辛亥革命」)を脱稿。濱本真実(京大・院)は九年ぶりの参加。その間に「中世ロシア文獻『カザンハン国史』の書誌学的諸問題と史料的价值」(『史林』八三一、二〇〇〇)を発表。また一年間のモスクワ留学を経験。林隣介(東外大・院)はクリミア・ハーン国の対オスマン朝関係进行研究。林俊雄(創価大)は『騎馬遊牧民の黄金文化』(並河萬里財団『季刊文化遺産』一二号、二〇〇二)を監修。またロシア語論文の和訳「天山山中のルーニック碑文を伴う岩画」(『中央天山で新たに発見された古テュルク・ルーニック碑文』を『シルクロード研究』三(二〇〇二)に発表。広川佐保(一橋大・学振)は近代日本・内モンゴル関係を研究。フフホト、ウランホト、張家口での聞き取り調査を行ない、「ある満洲国興安省官吏の回想録」(『近代東北アジア研究会ニューズレター』一三、二〇〇一)を執筆。藤本透子(京大・院)はカザクの家族と子育てについて人類学的に研究中。「社会変化期におけるカザク女性たちの子育て」(日本カザフ研究会「中央アジア乾燥地における大規模灌漑の生態環境と社会経済に与える影響」二〇〇一年調査報告書)、「カザフスタン／子どもの成長儀

礼にみるイスラーム」(アジア経済研究所「ワールド・トレンド」二〇〇二年十月号)を執筆。細谷良夫(東北学院大)は鑲紅旗檔案の資料集の第四冊 *The Bordered Red Banner Archives in the Toyo Bunko* を東洋文庫から公刊。また大興安嶺地域のフィールド調査も継続。堀川徹(京都外大)はウズベキスタン所蔵のヒヴァ・ハーン国法廷文書カタログを磯貝健一らと共に公刊。ウズベキスタン側との共同研究を本格的に発足させ、またサマルカンド所蔵の同種文書についても調査予定とのこと。松井太(弘前大)は昨年のクリルタイでの発表内容を「モンゴル時代ウイグルistanの税役制度と徴税システム」として松田科研報告書に発表。松岡雄太(九大・院)は言語学専攻。現代朝鮮語に関する修論とともに、一八世紀の司訳院における蒙滿漢の老乞大に関する研究を準備中。松田孝一(大阪国際大)は十年ぶりの参加。村岡・松井ほか計八名で科研を組織、代表者として山西地方の元代石刻とモンゴル高原の遺跡を調査し、報告書『碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究』を公刊。村岡とともにアルタイ方面の軍事拠点「称海屯田」の所在を検討中。丸山健太(東北学院大・院)は清朝八旗制进行研究。嘉慶・同光年間の旗人の生計問題に関する修論を準備中。村岡倫(龍大)は意外にも初参加。松田とともに

に山西・モンゴル高原の現地調査を行ない、松田科研報告書に「モンゴル時代の右翼ウルスと山西地方」を執筆。森川哲雄（九大）は「一七世紀から一八世紀初頭のモンゴル年代記について」（『東洋史研究』六一―一、二〇〇二）を執筆。森部豊（筑波大）は「後晋安万金・何氏夫妻墓誌銘及び何君政墓誌銘」（『内陸アジア言語の研究』一六、二〇〇一）、「唐前半期河北地域における非漢族の分布と安史軍淵源の一形態」（『唐代史研究』五、二〇〇二）を執筆し、唐・五代のソグド系武人勢力の考察を進める。山田美保（都立大泉学園高）は「世界史教育におけるマカートニ―使節団」（『総合歴史教育』三七、二〇〇一）を発表、また高校世界史Bの指導書作成で五代・モンゴル期を扱う。山本明志（阪大・院）はモンゴル帝国とチベット諸氏族との関係进行研究。白石「チンギス・カン」の考古学」の新刊紹介を『史学雑誌』に、また佐藤らと「烏臺筆補」譯註稿」を共訳発表。吉田世津子（四国学院大）はクルグズ（キルギス）農村社会の家族・親族関係やイスラーム信仰を人類学的に研究。吉田龍博（東北大・院）は一九世紀後半のクリミア半島におけるムスリムの教育について、オスマン期の新聞、ロシア文部省資料などを用いて研究中。渡辺祐希（東北学院大・学部）は何と自転車で仙台から野尻湖までを走破。清朝入関前の八旗蒙古成立過程に関する卒論を準備中。

マリア・サーキム（新疆医科大）は2度目の参加。現在はウイグル伝統医学に対するアニミズム・シャマニズムの影響に関心をもつ。なお新疆ウイグル自治区主席が①ウイグル人にも名字をつける②ローマ字転写を回復する、の2点を主張し、そのためのプロジェクトが開始されたという情報を提供。また新疆から日本訪問中のマルズカ（新疆大教師、中大・外国人研究員）、ムバラク（新疆大出身）、レナ（中大・研究生）も参加した。

次に各日の研究報告の内容を紹介する。

【七月二十一日】

白石典之「モンゴル国アウラガ遺跡の調査」…前述の「新世紀プロジェクト」の一環として開始された遺跡調査の成果をスライドを用いて紹介。アウラガ遺跡の表面調査結果を文献史料とも照合し、チンギスの「大オールド」と断定した。また、金朝のモンゴル高原征討の紀功碑であるセルベン・ハールガ岩壁碑文についても、新規拓本採集作業などの情報を提供した。

【七月二十二日】

佐藤貴保「『金史』交聘表に見る西夏の朝貢使節について」…西夏の朝貢使節が金国内で私貿易を行っていたことを指摘した上で、『金史』交聘表に記録される遺金使節の正使・副使の姓名及び官称号から人選の傾向を分析。分析

の結果、様々な民族・部族出身者が任命され、私貿易の利益確保だけでなく官僚にとつて昇進の契機ともなったこと、正使に宿衛関連の職事官、副使に宋代の館職のごとき称号を持つ者が任命され、再任時に副使から正使への昇格が見られないことから、西夏の官僚登用法には宿衛系統（武官）と試験採用系統（文官）の二つがあり、前者が正使、後者が副使に選ばれていることを明らかにした。

市丸智子「元代の華北における貨幣使用の実態について」
…元代の各種貨幣（銀・鈔・銅錢）の実際の使用状況や、鈔の貨幣単位（錠両単位・貫文単位）の使用方法の差異について、特に華北における状況を石刻史料から考察。まず、使用貨幣が鈔法の導入により銀から鈔へと移行したことを明らかにした。次に、銀使用の影響により鈔に導入された錠両単位が、実際には下賜・財政運営等の状況に使用が限られていること、政府の影響が強かったであろう華北においても鈔への貫文単位が民間で一般的に用いられていたことを指摘した。これらの状況から、元代においても、民間レベルでは宋代からの慣習的な貨幣使用の連続性が指摘しうると結論づけた。

松井太「中世ウイグル社会の隣保組織」…既発表・未発表の中世ウイグル語世俗文書中にウイグル語 *borun* 「保証人」および *borun-jug* 「保証人組合、隣保組織」の在証

例を確認し、また *borun-jug* が徴税単位としても機能していることを論証。さらに、この隣保組織の存在を念頭に置くことで、従来歴史資料として利用されていないウイグル語契約文書・行政命令文書についても、内容理解や歴史的背景（徴税制度、社会的・経済的慣行）の再構成を深化させ得ることを提示した。

華立「檔案史料でみる清代新疆の回民（中国ムスリム）たち」…乾隆以降を中心に、回民の新疆への移住の実態を、近年大量に公刊が進んだ滿文・漢文の檔案史料から検討。新疆移住回民の出身地は陝西・甘肅を中心とし、移住回民の職業は貿易関係（商業・運輸業・手工業）に集中していることなどを指摘。さらに新疆・甘肅・陝西にまたがって回民の同郷・同教意識が看取できる一方、甘肅での回民反乱とその鎮定が新疆移住者にも清朝の取締強化という形で波及していることを確認し、同治初期の新疆回民反乱への影響を推測した。

王宏剛「アルタイ民族の文化精神の起源と発展を探索する」…東北地方を中心にフィールド調査を行なった際のスライドやビデオ映像により、トゥングース系諸族のシャマニズム信仰を紹介。シャマンと中国当局との良好な関係など、興味深い情報も提供した。

吉田世津子「中央アジアの人生儀礼」…クルグズスタン

のナルン州コチコル地区カラタル村でのフィールド調査結果をスライドとともに報告。誕生・割礼・結婚・葬礼・祭祀などの人生儀礼の特徴を整理し、多くの儀礼は必ずしも非日常的ではないものの、葬礼が最大の節目となっていることを指摘した。

林俊雄「石人の変遷」…飛び入りながら、今年も恒例のスライド報告。モンゴル高原・カザフスタンを中心に石人の有無・形態的特徴を整理した上で、第一突厥時代には無かった石人文化が第二突厥時代で発生し、ウイグル時代には消滅したものの、おそらくキプチャク族が継承してモンゴル帝国に再輸入したという仮説を提示した。

【七月二十三日】

杉山清彦「清初侍衛考」…ヌルハチ・ホンタイジ時代の皇帝・諸王の親衛隊（*nyaa* 侍衛・護衛）について、八旗上層部を構成する有力氏族出身者や帰順勢力の首長層（特にその子弟）を中心に選抜された親衛隊員から、各旗首脳や中央政府高官が輩出されたこと、また皇帝・諸王がそれぞれ保有する親衛隊が家政機関とともにその側近を構成していたことなどを提示。これらの諸特徴がモンゴル帝国時代の親衛隊（*ケシク*）とも相似することを指摘し、親衛隊を清朝の「中央ユーラシア的特質」の核心と結論づけた。

小沼孝博「清朝治下の内陸アジアにおける『旗体制』の

展開」…八旗・部族八旗・ジャサク旗の壮丁が共通して負担した軍役義務を検討し、乾隆朝以降の「旗」を介した内陸アジア（藩部）支配の実体を探った。まず満文檔案に頻出し、治下の内陸アジア住民を示す「*jeen albatu*」という表現、及びモンゴルのノヤン層を皇帝（*aha* 奴僕）として支配下に範疇へ取り込んでいく動きに注目し、「旗」支配を貫く「*jeen-aha albatu*」という関係軸を提示した。次に各「旗」の壮丁が負担したカルン駐守の任務を分析し、清朝が戦時に効率的に軍事力を得るため、平時から部族八旗兵とジャサク旗兵を駐防八旗と同じ軍紀を遵守する軍団として養成していたことを指摘し、「旗」に編成された各集団を一体として運用する「旗体制」支配システムが構築・展開されていたと結論づけた。

藤本透子「カザクスタンにおける成長儀礼の実践と社会変化」…二〇〇一年七月～十月にかけてのカザクスタンでのヒアリング調査をもとに、子育てに関連する成長儀礼の実践状況について、とくに旧ソ連時代と独立後の比較を中心に検討。旧ソ連時代に行なわれなかったイスラーム的儀礼が復興しつつあることを報告した。

澁谷浩一「キャフタ条約締結過程の研究―清側ロシア文条約と国境貿易条項」…キャフタ条約について、ロシア側主導で一七二七年十月に締結されたという通説を、ロシア

所蔵の外交文書や清側檔案から再検討。その結果、条約交渉は一七二七年十月以降にも継続されていたこと、また清朝側が作成した草案の内容も条約に反映していることを論証し、同条約を「ロシア側の外交的勝利」とする従来の見解が一面的に過ぎることを指摘した。

濱本真実「タタール土族のロシア正教改宗」…ロシア政府による初期（一六世紀後半～一七世紀）のムスリム臣民統治政策解明の一環として、タタール土族のロシア正教改宗を取り上げた。外務庁の「タタール文書」とロシア政府によって出された法令をもとに、タタール土族の改宗過程を追い、ロシア政府が遅くとも一七世紀前半から経済的な利益を与えることによってタタール土族の正教改宗を促したこと、この政策は非キリスト教徒の封土所有を制限する政策に転化したこと、一七世紀を通じてタタール土族に対する改宗圧力が強まったことを明らかにした。

菊田悠「暮らしの中の信仰実践―フェルガナ地方のイスラームを垣間見て」…二〇〇二年三月～七月の約四ヵ月半にわたるウズベキスタン共和国フェルガナ州リシタン市でのフィールドワークに基づき、主にイスラームに関連した施設や儀礼をスライドで紹介した。

以上で予定のプログラムを終え、七月二十四日の朝食後に散会した。

彙 報 松井

今回のクリルタイでは、例年に比べて時間的にタイトなプログラムが組まれた。しかし、結果的に各報告者が研究成果の要点をより強調する形となり、いずれも例年以上に迫力ある内容と筆者には感じられた。もちろん、セッション時間外の食事・懇親会やエクスカーションの野尻湖遊覧などでも、参加者が活発に議論を交え、また情報を交換しあったことは例年通りである。

なお、第四十回の節目を迎える次回の野尻湖クリルタイは、二〇〇三年七月十九日（土）～二十二日（火）に開催される予定である。